HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	気管内吸引技術の動作分析による乾燥法と浸漬法の比較
Author(s)	伊藤, 紀代
Citation	日本医工学治療学会第25回学術大会. 2009
Issue Date	2009
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53107
Type	proceedings (author version)
File Information	ikogaku-25.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

気管内吸引技術の動作分析による乾燥法と浸漬法の比較

伊藤紀代

【目的】

気管内吸引には、吸引チューブを乾燥させて保存する乾燥法と、消毒液に浸しておく浸漬法があり、細菌数、コスト等に関して比較されているが、動作分析による検討話されていない。在宅の重層心身障がい児(者)の家族が行う気管内吸引法として、より簡便な方法を検討する目的で、乾燥法と浸漬法を比較した。

【方法】

調査期間は 2006 年 11 月から 12 月である。重症心身障がい児(者)施設 2 施設に勤務する看護師 2 名ずつ、計 4 名に研究の趣旨と協力内容について説明し、文書による同意を得た。気管内吸引手技をビデオ録画し、ディスポーザブル手袋をはめてからカテーテルを挿入するまでを Duration A、カテーテルを抜去してから手袋を捨てるまでを Duration B、とし、その 2 区間において所要時間を計測した。さらに、カテーテルを持つ、電源を入れるなど、看護師の各動作を単位動作に分け、単位動作の数をカウントした。

【結果】

計 23 例について分析したところ、Duration A の平均は乾燥法で 19.17 秒、浸漬法で 24.74 秒であった。Duration B の平均は乾燥法で 12.58 秒、浸漬法で 19.86 秒であった。ウェルチの t 検定の結果、Duration A と B、共に有意差があり、(t=0.11,　0.02, $\alpha=0.05$)、乾燥法の方が浸漬右方よりも所要時間が短いという結果となった。また、単位動作に関しても、乾燥法は 15 動作と 14 動作、浸漬法は 19 動作と 26 動作であり、乾燥法において浸漬法よりも単位動作数が少ないという結果となった（$t=0.007326$, $\alpha=0.05$)。

【結論】

気管内吸引のチューブ保管法に関しては、乾燥法が短時間で、手順を少なく簡便に技術を提供できると考えられた。また、動作数が少ないことは、吸引時の呼吸状態の観察など、複数の課題を同時に行う時に有利と考えられた。